

本学教員執筆書籍の紹介

藤尾均ほか多数執筆

シリーズ生命倫理学・全 20 巻 第 1 巻『生命倫理学の基本構図』

丸善出版株式会社 2012 年 1 月刊 A 5 判 260 ページ 5,800 円 + 税

藤 尾 均

生命倫理（バイオエシックス）が学問として確立され始めたのは 1960 年代の米国で、BIOETHICS の語の最初の使用は 1971 年とされる。1979 年には日本初の生命倫理のコースが上智大学大学院に設けられた。日本生命倫理学会の発足は 1988 年であった。外国の物真似や翻訳ではない日本独自の『生命倫理事典』が日本で初めて刊行されたのは 2002 年のことであり、これには私も 5 名の編集委員のひとりとして加わった。

そして 2012 年、いよいよ、日本の生命倫理学の現在の到達点を網羅的に提示する画期的な書籍が世に問われることとなった。丸善出版株式会社から公刊される〈シリーズ生命倫理学・全 20 巻〉がそれである。

これは、3 名の編集顧問と 40 名の編集委員と総勢約 240 名の執筆陣からなる一大プロジェクトであり、編集顧問には、高久史磨日本医学会会長・木村利人日本生命倫理学会会長・島蘭進日本宗教学会会長といった斯界の最高権威が名を連ねてくださっている。

各巻のラインナップは、〈第 1 巻 生命倫理学とは何か〉〈第 2 巻 生命倫理の基本概念〉〈第 3 巻 移植医療〉〈第 4 巻 終末期医療〉〈第 5 巻 安楽死・尊厳死〉〈第 6 巻 生殖医療〉〈第 7 巻 周産期・新生児・小児医療〉〈第 8 巻 高齢者・難病・障害者医療〉〈第 9 巻 精神科医療〉〈第 10 巻 救急医療〉〈第 11 巻 遺伝子と医療〉〈第 12 巻 先端医療〉〈第 13 巻 臨床倫理〉〈第 14 巻 看護倫理〉〈第 15 巻 医学研究〉〈第 16 巻 医療情報〉〈第 17 巻 医療制度・医療政策・医療経済〉〈第 18 巻 医療事故と医療人権侵害〉〈第 19 巻 医療倫理教育〉〈第 20 巻 生命倫理のフロンティア〉であり、全巻完結のあかつきには、生命倫理のほぼすべての領域にわたって日本最先端の研究結果が集大成されたことになるはずである。

最初に刊行される第 1 巻は総論をなす巻で、編集委員は、かつて旭川医科大学が非常勤講師として招聘し

た今井道夫氏（札幌医科大学名誉教授）と、かつて私と共に『生命倫理事典』（太陽出版刊）の編集委員を務めた森下直貴氏（浜松医科大学教授）である。そして私も、この第 1 巻に執筆陣のひとりとして名を連ねる栄誉に浴することができた。

本巻の内容は、〈第 1 章 生命倫理学とは何か〉〈第 2 章 日本の生命倫理学〉〈第 3 章 西洋の伝統的医療倫理〉〈第 4 章 東洋と日本の伝統的医療倫理〉〈第 5 章 米国および英語圏のバイオエシックス〉〈第 6 章 独語圏の生命倫理〉〈第 7 章 仏語圏の生命倫理〉〈第 8 章 中国の生命倫理〉〈第 9 章 韓国の生命倫理〉〈第 10 章 生命倫理の法的次元〉〈第 11 章 患者－医療者関係〉〈第 12 章 生命倫理学の方法論〉〈第 13 章 医学・医療と生命倫理〉〈第 14 章 市民運動としてのバイオエシックス〉〈第 15 章 宗教と生命倫理〉〈第 16 章 哲学としての生命倫理〉である。

私に執筆の機会を与えられたのは第 3 章すなわち「西洋の伝統的医療倫理」である。この論考は、生命倫理学生成の重要な基盤のひとつをなす 2 千数百年に及ぶ西洋の伝統的医療倫理をわずか 2 万字余りで歴史的に俯瞰するという、いささか気宇廣大ともいえる試みであり、内容がどこまで正鵠を射ているかは読者諸賢の御判断に俟つかないが、敢えて音楽用語を借用して私の執筆意図を端的に表現すると、「ヒポクラテスの主題による変奏曲とフーガ」とでもなろうか。ここに登場するのは、今なお「医聖」「医学の父」などと称される古代ギリシャのヒポクラテスをはじめ、西洋医学思想史を論ずるにあたって決して避けては通れないプラトン、ガレノス、イブン・シーナー、パラケルスス、モンテーニュ、ベーコン、デカルト、ラ・メトリ、ルソー、フーフエラント、ベルナル、ヤスパースなどである。（旭川医科大学 歴史・哲学）